

## 日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者

主査 松川 淳子<sup>\*1</sup>

委員 中島 明子<sup>\*\*</sup> 杉野 展子<sup>\*\*</sup> 宮本 伸子<sup>\*\*</sup>

本研究は、1960年代前半までに建築にかかわる活動を開始していたか、大学を卒業して建築家・技術者になった女性を「草創期」の女性建築家として、第1に、散逸しつつあるその資料を収集・整理すること、第2に、その作業を通して彼女たちの特質を明らかにすることを目的としている。その結果、特質として、強い経済的自立意識とそれを裏付ける使命感にも似た仕事に対する熱意が見られること、その背景に戦後の民主化時代と、仲間や組織、よき師の存在があることなどが明らかになった。資料のドキュメンテーションについては、吉田文子の資料を中心に進み、アーカイブの必要性という課題が上がっている。

キーワード： 1) 女性建築家 2) パイオニア 3) 女性と建築展 4) アーカイブ 5) 吉田 文子  
6) 浜口 ミホ 7) 土浦 信子 8) ポドコ 9) UIFA 10) IAWA

### WOMEN PIONEERS IN ARCHITECTURE AROUND WORLD WAR II

Ch. Junko Matsukawa

Mem. Akiko Nakajima, Nobuko Sugino, Nobuko Miyamoto

The aims of this study are documenting and analyzing the materials that we collected for the Exhibition of “Women and Architecture”, and to define of the features of women pioneer architects in Japan. We defined the pioneer women architects and engineers in Japan as women who began their architectural activities or graduated from universities before the mid-1960s. We documented certain materials and suggested that we must set up an archive of women architects. As for the features of pioneer women architects, they had strong-will for economic independence and enthusiasm for their work supported by the democratic movement, good colleagues and mentors.

#### 1. はじめに

本研究は（財）女性労働協会「女性と仕事の未来館」における「女性と建築展—仕事と家庭の両立を支援する住まい・まちづくりに向けて—」<sup>註1)</sup>の展示企画の検討を契機にスタートした。この企画展は、少子高齢者社会を背景に、家族責任をもって働く女性を生活空間から支援する可能性を問うと同時に、広い意味での生活空間のつくり手としての女性の発展をも示したものであった。

展示に際しては、資料収集によって日本における70年余の近代女性建築家史を概観することができた。パイオニアの中でもごく初期の方々が逝去され、また女性が初めて高等教育を受けられるようになった新制大学制度の下で学んだ女性が第一線から退き始め、所蔵されていた資料が何らかの形で処分されようとする時期にあたったことなどにより、歴史的にも貴重な資料が収集できた。

そうした資料を保存し活用することを通して、ジェンダーの視点から建築史のなかに埋め戻す作業の必要性が

痛感された。すでに海外では、女性建築家のアーカイブが追求されており、日本においてもその必要性が課題となる時期に入ったといえよう。

#### 1.1 研究の目的

本研究の目的の第1は、散逸しつつある草創期の女性建築家・技術者のデータを理論的系統的に考証し整理することであり、第2は、その作業等を通して日本における草創期の女性建築家・技術者の特質を明らかにし、女性建築家論、女性建築家史の構築に寄与することである。

#### 1.2 研究の方法

第1は、「女性と建築展」で収集された吉田文子と女性建築家組織にかかわる資料を中心に整理・考証し作成したデータの再分析を行う。第2に、パイオニア期の女性建築家へのインタビューと講演記録の再生・文書化を実施した。尚本稿では「女性建築家・技術者」を、建築設

\*1 株式会社 生活構造研究所 代表

\*2 和洋女子大学 教授

\*3 株式会社 生活構造研究所 研究員

\*4 国際技能工芸機構 ものづくり大学 学生課長

計業務に携わる女性だけではなく、建築、住居学科出身の行政建築家、大学教員、研究者をも対象にしている。

## 2. 女性建築家の登場とその背景

日本における女性建築家の歴史は、土浦信子がアメリカから帰国して夫と共に1929年から設計活動を開始し、吉田文子が1931年に早稲田大学付属早稲田工手学校建築科を卒業し、翌年鈴木小松商店に入社したあたりをスタートとすればほぼ70年余になる。アメリカでは1888年にL.ベッシュが最初のアメリカ建築家協会(AIA)会員になり、フィンランドでは1890年に最初のヘルシンキ工科大学卒の女子学生<sup>註2)</sup>を出した時点と比べると、半世紀遅れて出発した。土浦と吉田の少し後に浜口ミホが、東京帝国大学建築学科の聴講生を経て、48年に最初の女性による設計事務所を開設している。

その後、戦後の新制大学制度の下で、51年に日本女子大学生活芸術科住居専攻が最初の卒業生を送り出し、また建築学科を卒業した女性は53年から徐々に登場し、高等教育を受けて建築家となる女性が輩出されていった。

これら草創期の女性建築家達は、戦後の民主化、とりわけ男女平等の高まりを背景に、男性領域であった「建築」に初めて女性が踏み込んだという関心を集め、「初の」建築学科女子学生、「初の」女性建築家等とマスコミに取り上げられた。これを女性建築家が注目される第1期とすれば、第2期は1975年、国連の国際婦人年から85年の頃までである。建築関係業務に携わる女性建築家・技術者の量的増大を基盤に、フェミニズム運動の高揚、雇用平等法や性差別禁止法などの法的整備が国内外で進んだ時期である。日本では各地に女性建築家・技術者組織が設立され、イギリスではフェミニスト建築家組合マトリックスが結成され<sup>註3)</sup>、フィンランドでは82年に女性パイオニア建築家展を開催している<sup>註4)</sup>。「セクシュアリティと空間」のテーマを掲げ、建築のジェンダーや、建築史を性の視点から再考する学際的作業も進み始めた<sup>註5)</sup>。

今日、日本における女性建築家への注目は、小川信子・田中厚子による土浦信子についての著作<sup>註6)</sup>と北川圭子による浜口ミホの伝記<sup>註7)</sup>の出版、故林雅子の作品展と作品集の発刊<sup>註8)</sup>が相次ぎ、01年に日本女子大学住居学科が50周年を迎え、またこれらを包括的に表現しながら吉田文子やポドコの資料を展示した「女性と建築展」の開催がある。このことは建築と建築家のジェンダー視点からの再評価であり、女性建築家の「再発見」でもある。そこから女性建築家が建築と建築家の何を変えてきているかを明らかにする段階にきており、イギリス王立建築家協会において、建築家の機会均等と変革を建築と建築家の「多様性」として捉えていることは示唆に富んでいる<sup>註9)</sup>。

## 3. <草創期>の位置づけ

この章では、本研究でとりあげている「草創期」の位置づけを、新制大学における女子の建築教育という視点から考察する。

前章で述べたように戦前から建築家として活躍した女性は僅かながらいるが、女性が高等教育で正規に建築を学べるようになったのは、新制大学制度以降である。なお、現在、大学における建築教育には、大きく分けて、主に女子大学に設置された「家政学部住居系学科」と男女共学大学に多い「建築系学科」の2つがある。本章では、「草創期」の検討にあたって、男女共学大学建築系学科で学んだ女子学生の人数及び男女比の推移に着目した。

### 3.1 建築学科卒業生の女性数及び女性比率の推移

建築系学科で学んだ女子学生の比率の推移に関しては、前述した「女性と建築展」における調査がある。これは男女共学大学9学科について、新制大学制度になって初めての卒業年である1953年以降の卒業生に占める女子学生の比率を調査している。

調査対象大学は、名簿等で新制大学以降のデータを入手することのできた、京都大学工学部建築学科、京都府立大学住居学科(初の卒業生は1970年)、千葉大学工学部建築学科、東京大学工学部建築学科、同都市工学科(初の卒業生は1966年)、東京芸術大学美術学部建築学科、北海道大学工学部建築工学科、横浜国立大学工学部建築学科、早稲田大学理工学部建築学科の9学科である(いずれも名称は設置時のもの)。

これによると、新制大学最初の卒業年次である1953年には東京芸術大学美術学部建築学科で2人の女子学生が卒業している。続く1954年に北海道大学工学部建築工学科で1名、横浜国立大学工学部建築学科で1名が、翌1955年には北海道大学工学部建築工学科1名、早稲田大学理工学部建築学科2名の女子学生が卒業している。1960年までの卒業生の合計は、7学科(京都府立大学、東京大学都市工学科を除く)で30名であった。このうち最も多いのは早稲田大学の14名、最も少ないのはこの間女子の卒業生のいなかった東京大学建築学科である(表3-1)。

表3-1 建築系学科卒業生に占める女子学生数

卒業年	京都大学	京都府立大学	千葉大学	東京大学・建築	東京大学・都市	東京芸術大学	北海道大学	横浜国立大学	早稲田大学	合計
1953-60	2	-	3	0	-	4	3	4	14	30
61-70	0	15	13	6	2	7	5	2	29	62
71-80	15	114	17	19	7	18	28	19	61	298
81-90	42	157	75	37	14	25	37	64	110	561
91-00	87	264	221	87	61	42	100	139	233	1234

\* 京都府立大学は70年、東京大学都市工学科は66年より。  
出典 女性と建築展

女子学生数はほとんどの学科で上昇下降を繰り返し、単純な経年的増加傾向は示していないが、全体としては増加傾向が読み取れる。9学科合計で見ると、1961年から70年までの10年間は、その前の30人から2倍の62人に、さらにその後の10年間は5倍の298人へと、急激な上昇傾向を示している。

このように、1960年代前半までの女子学生数はとくに少なく、<草創期>と呼ぶにふさわしい。これは、後述するPODOKOなど女性の建築家が連携し、地位向上を求め、女性に厳しい環境の中で仕事を続けるための活動を活発に行った時期とも重なる。女子学生数及びその比率の例はグラフ(図3-1)のようになっている。

また、同調査では、2001(平成12)年度の建築系学科卒業生比率も調査している。全国の建築系学科を有する大学109校、127学科に対し平成12年度卒業生数と女子学生比率を調査した(回答89学科、回収率70.0%)。これに、卒業生名簿から推移を調査した6学科のデータを加えた95学科について、女子学生数と比率をみている。

95学科の卒業生中、女子学生の比率は21.4%、建築を学ぶ学生の5人に1人が女子学生という結果であった。

建築系学科で教育を受けた女子学生は、1953年の2人から始まり、半世紀を経て、5人に1人が女子学生という比率にまで到達した。(図3-2)

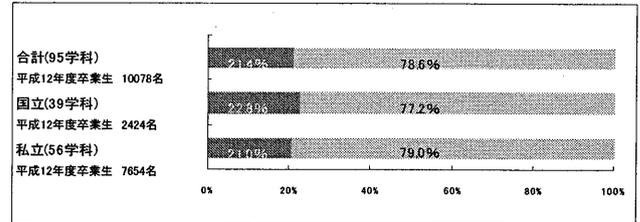


図3-2 2000年度建築系学科卒業生

### 3.2 家政学部住居系学科の役割

一方、家政学部に設置された住居系学科においても建築士の資格を取得出来る。これらの多くは女子大学か、女子学生の比率の高い公立大学に置かれ、住居・住環境学を学んだ女性を多数輩出し、女性建築家・技術者の裾野を広げてきた。新制大学に先駆けて住居学専攻を設置した日本女子大学では、1951年の卒業生以来、1990年までに2837人の卒業生を送り出している<sup>注10)</sup>。1962年に住居学科となり、資格取得の体制を整えた。

### 3.3 日本における女性建築家の<草創期>

以上述べてきたことに鑑み、本研究では、日本における女性建築家・技術者の<草創期>とは1960年代前半までを指し、このときまでに建築活動に携わっている人を草創期の女性建築家・技術者として扱うことにする。

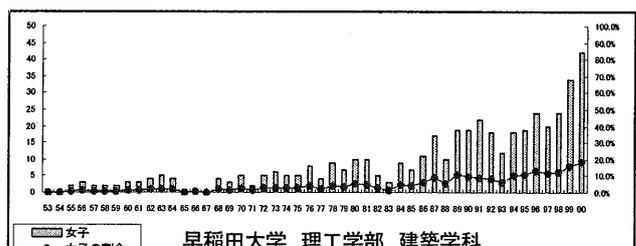
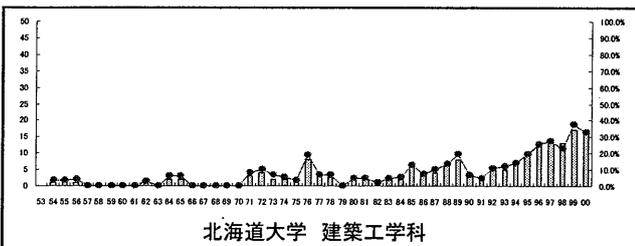
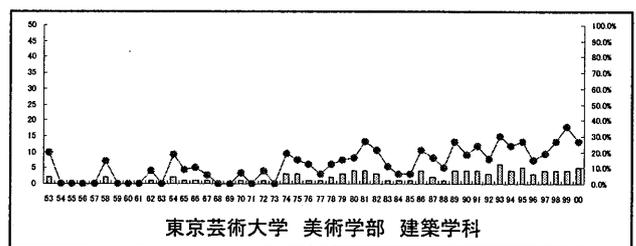
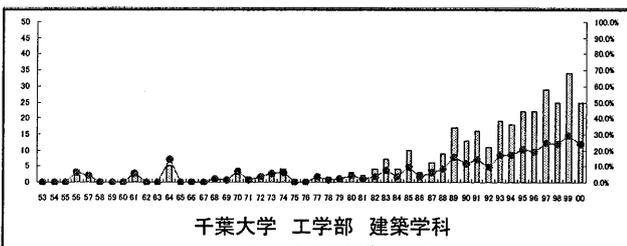
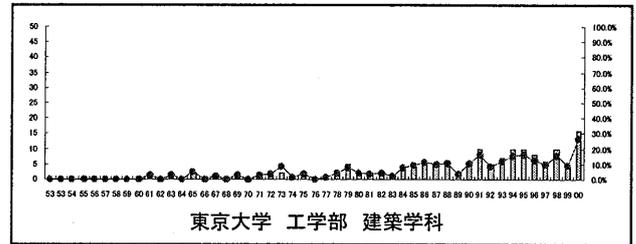
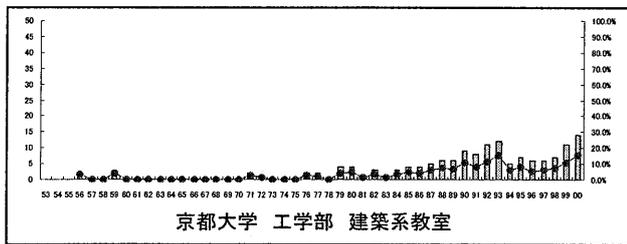


図3-1 建築系学科卒業生における女子学生数及び比率

#### 4. <草創期>の女性建築家

本章では、草創期の女性建築家について立ち入って論及し、そこから草創期の女性建築家の特質を描きだそうと試みている。区分としては草創期をさらに①戦前・戦中に教育を受けた女性②新制大学家政学部系住居学科出身者③同建築系学科出身者に分けている。

##### 4.1 戦前・戦中の教育を受けた人々

繰り返し述べてきたように、女性が男性と対等に高等教育を受けられるようになったのは第二次大戦後の新制大学制度発足以降である。それ以前に建築家になる道は、海外に行くか、建築学科の聴講生になるか、あるいは僅かに開かれていた共学の専門学校に行くしかなかった。北川圭子は、浜口ミホを「女性建築家第一号」<sup>註11)</sup>としている。建築設計活動をしていた女性としてはその前に土浦信子と吉田文子の2人がいた。尚吉田文子に関しては、新たに蒐集された資料に基づきやや詳細に論及する。戦前の家政学部出身者に関しては注12)を参照。

##### 4.1.1 土浦信子と浜口ミホ

戦前唯一の女性建築家として活躍した土浦信子は自分から建築家の道を目指そうと思ったのではない。建築家土浦亀城と結婚し、渡米して、世界的に著名な建築家フランク・ロイド・ライトの下で2年余にわたって働く機会を得たからであった。

土浦信子は1900年、吉野作造・たまの長女として生まれた。22年東京帝国大学建築学科の土浦亀城と結婚し、翌年ライトを訪ね、スタジオで働いた。信子は2年余の渡米時代に基本的な製図の知識と技術は身につけたが、正規の建築教育を受けていなかったため、帰国してからもアメリカの通信教育で建築設計の勉強を続けていたという<sup>註13)</sup>。33年に土浦亀城建築設計事務所を開設した時には、信子は新聞に「日本にみ一（唯一）の女建築家」と評されるようになっていた。しかし信子が建築設計に携わっていたのは1930年代の短い期間で、戦後は建築の仕事が「途中であきらめ」<sup>註14)</sup>、抽象画家としての道を歩んでおり、その理由は定かではない。小川・田中らの著書が出なければ歴史から消えたかもしれない。1998年逝去。

浜口ミホは土浦信子より遅く、1915年に生まれた。東京女子高等師範学校家事科で市浦健に住居学、建築製図の指導を受けたことをきっかけに建築を学ぼうと決意し、卒業後今治高女に就任したが、38年、1年間東京帝国大学建築学科の聴講生となった。翌年には前川国男建築設計事務所に入所。41年に浜口隆一と結婚し、北海道に入植している。48年に自宅に「浜口ミホ住宅相談所」を開設し、49年に発表した『日本住宅の封建制』は建築界に多大な影響を与えた。

##### 4.1.2 吉田文子の生涯とその位置

###### 1) 吉田文子の遺贈資料

吉田文子は2001(平成13)年12月8日、88歳の生涯を閉じた。その後、遺族から文子の遺品や所蔵資料の一部を生活構造研究所が譲り受けることになった。その内容は、文子が愛用した机・椅子・製図板等の他、文子の原稿、手紙類(下書きを含む)、日誌や金銭管理に使っていた手帳、アルバムと写真、僅かの図面、個人及び事務所の経歴に関する資料、その他である。本研究会はこれらの資料のドキュメンテーションを行い、菅原可奈子が卒業論文<sup>註15)</sup>にまとめ、原資料は生活構造研究所に保管されている。本節はこれらの資料を基にまとめたものである。

###### 2) 「女子製図手」を越えて

吉田文子は土浦信子や浜口ミホが歩んだ道とは少し違っている。最初に卒業したのは各種学校であった中央工学校女子製図科であった。

中央工学校は1909(明治42)年に工業技術者育成を目的として設立された各種学校で、文子が入学した頃は神田一橋通にあった。ここに女子製図科が設置されたのは18(大正7)年で各種学校としては日本で最初であった。こうした「女子製図手」の養成は、日本の近代化に伴う都市再編と建築活動が活発となり、製図や複写機器が発達していない時代に、その支えとなる技術者が求められたからである。そして「緻密な頭脳と根気」<sup>註16)</sup>が必要とされるこの分野は、「手先の器用」な女子に向けた新しい職業として奨励され、半年から1年の修業期間の各種学校が各地に設置された。

文子は1928年、15歳の時に第21回卒業生となっている。建築家ではなく、技術者としての女子製図手が、大正から昭和にかけて数多く養成されその一人であった。

しかし、文子は製図手にはならなかった。就職はしたが、翌年の3月に早稲田大学付属工手学校(夜学)に入学した。工手学校は1911(明治44)年に中等技術者養成として設立され、22年に女子の入学を決定した建築系唯一の共学の専門学校である。当時文子ともう一人の女子が入学していた。文子は勉強に打ち込み、進級の際に成績優秀で表彰されている。

このような経歴からみれば、吉田文子は技術者養成コースから浮上した女性であり、製図手に留まらず、建築設計者の道を踏み出した最初の女性となった。

###### 3) 建築を選んだ動機

では、文子がなぜ中央工学校に進学し、さらに早稲田工手学校まで進んだのか。

第1の理由は家庭環境にある。文子は1913(大正2)年12月5日、吉田一市・リヨの長女として島根県津和野町

に生まれた。父は大工の棟梁であり建築へ向う環境は最初からあった。一家は一時期中国山東省青島に渡ったこともあったが、常に父の仕事の関係から、自宅2階には福岡や熊本高等工業卒の青年が居候しており、身近に図面や教材を見ており、小学校の内から「建築家も悪くはない」と思ったと記録にある。

第2は経済的理由である。一家は関東大震災直後の建築ブームにのって中国から日本に引き揚げた。父親は腕のよい大工で仕事はあったが経済的なゆとりはなかったらしい。小学校卒業後に東京帝大のセツルメントの市民学校“夜”に出かけたことも影響しているのか、文子自身職業婦人になりたいと考えており、何とか上の学校に行きたかった。しかし、女学校の雰囲気にはなじめず1929(昭和4)年に中央工学校に入学したのだった。

#### 4) 吉田設計事務所開設までの職歴

文子は早稲田工手学校在学時代に、大学建築学科田辺泰教授研究室の助手となり、31年7月に卒業し翌年1月まで勤めた。仕事は日本社寺・城郭等の図面作成調査である。中央工学校で習得した技術を見込まれたからであろうが、人柄にも好感をもたれていた。

工手学校卒業後は震災復興も一段落しており男子にとっても就職難の時期であった。ましてや女性の建築技術者の就職など考えられなかったが、幸運にも32年には鈴木小松商店技術部に就職し、厨房設計施工の仕事につくことができた。女性が社長であったからでもあろう。3年間ではあったが、工事は全て直営で、軍隊、病院、料理教室、服部時計店、東宝劇場、明治生命館などの厨房設計の仕事に携わり、忙しくも充実した毎日であったという。ずっと後の1997年秋、明治生命本社ビル(岡田信一郎設計)が重要文化財に指定され、文子もこの建築にかかわったとして『重文 明治生命館覚書』に当時の事情を記しているが、弱冠21歳の女性に対して、明治生命の営繕課長が文子の実績に深く信頼を寄せていたことがわかる。文子は日常はYシャツにネクタイの背広といった男性のような姿が終生のトレードマークになっていたが、ここでは将校色防水布の乗馬服をオーダーし、長あみのお下げをターバンにして、手製の帽子を冠って現場に出かけていた。施行現場という男社会の中であって彼女の美学でもあった。

鈴木小松商店が倒産したため、35年に下請けだった佐藤鉄工所設計部に就職する。ここでは陸海軍施設などの厨房設備の設計施工を行っている。しかし、ここも3年で倒産し、再び田辺教授の助手として働いた後、39年(昭和14)年春に則武工業事務所に入った。

日本が太平洋戦争に乗り出し男子が次々に戦地に去っていった時期で、文子は職場を守って働いたが終戦後倒産し、やむなく独立して吉田設計事務所を開くことにな

った。スタートは「背水の陣」だったと回想している。

#### 5) 吉田設計事務所時代の仕事の特徴

1950(昭和25)年3月、文子は事務所を開設した。37歳である。事務所の業務としては、住宅、社屋、店舗の設計、工事監理、申請業務、土地家屋測量調査等を手がけ、被災工場の建て直しに奮闘したことは特筆に値する。

職員規模であるが、66年-69年の事務所の職員数は6-8人で大半は建築士の資格を有するが、大卒者は1~2名である。98年に稲門会に報告した文書には「25人前後」とあり、解散前にはかなりの規模になっていた。

1952年から73年まで(一部不明)の業務履歴に掲載された236件から業務の特徴をまとめると以下になる。

- ① 所在地は6割弱が東京で、神奈川、埼玉、千葉を入れると97%は首都圏である。1件ブラジルの事務所と工場があるが、詳細不明。
- ② 建物の用途別では住宅が3割弱であり、非住宅が圧倒的である。工場等の特殊設備をもった施設が半数を占めるところに特徴がある。
- ③ 建物構造は木造は4分の1で、鉄骨造、RC造が7割を占める。高さは2階までの低層が8割。

以上の実績からみると、吉田事務所の仕事は作品主義のアトリエ設計事務所ではなく、中規模の町場の生産施設を中心にした非住宅系設計事務所であった。

吉田文子が吉田設計事務所を閉じたのは1996(平成8)年、文子83歳であった。亡くなる5年前である。

#### 6) 吉田文子と団体所属

文子は各種の団体に所属し役職についている。主要な団体は、早稲田稲友会理事長(早稲田大学工手学校、同工業高校、同産業技術専修学校の同窓会)、稲門建築会副会長(建築学科同窓会)、早稲田大学校友会墨田稲門会副会長、日本建築学会評議員、東京建築士事務所協会研究部長・監事等である。文子の業績と人柄が評価されたのであろうが、文子自身は自分を許容し援助してくれた人への礼でもあった。

#### 7) 女性建築家における吉田文子の位置

建築家一般を、アトリエ建築家、町場建築家、行政建築家、ゼネコン建築家、大学建築家と分けるならば、土浦信子、浜口ミホが女性アトリエ建築家の水脈をつくり、吉田は町場建築家の水脈をつくった。

町場はより男性社会である。文子が一貫して乗馬服様のスーツに身を包んでいたことは、パイオニアの女性建築家として女性性を主張するのではなく、男性社会に入らざるを得ないことを証明するものであった。

吉田の仕事の質を女性の視点で評価することは難しい。むしろ、吉田文子の存在が、背後にある多くの女性建築

技術者の存在を示唆し、女性建築家の多様性の一端を切り拓いたとみることができるのではないか。

## 4.2 家政学部住居系学科卒業生

### 4.2.1 家政学部住居系学科

日本における女性建築家を特徴づけるものとして、家政学部住居系学科で建築士を養成してきたことである。

先駆的立場にあった日本女子大学の場合、1956年に実務期間2年で二級、4年後に一級建築士の受験資格を取得できるようになり、66年には卒業後の実務期間3年で一級建築士の受験資格を得ることが可能になった。住居学専攻出身者で最初に受験した林雅子、山田初江らは、早くも54年に一級建築士の資格を取得している。

### 4.2.2 日本女子大学生生活芸術科住居学専攻の第一世代

日本女子大学生生活芸術科は、1962年に住居学科が独立するまでは被服学専攻と住居学専攻で構成されていた。住居学科同窓会である住居の会が1990年に実施した「住居学科卒業生実態調査」<sup>註17)</sup>では、第1世代を昭和20年代の卒業生とし、これは1930年代前半に生まれた女性で、女性建築家のパイオニア層に一致する。1回生23人、2回生20名、3回生8名、4回生8名で、5回生以降定員が増え43名となっている。これら第一世代は「一貫して就労してきた者が23%と多い」のが特徴である。

第一世代の住居専攻への入学動機は、女子大の家政学ならよいという親の意向が背後にあるのが特徴で、その中で「生活芸術」の名に惹かれて選んでいる。山田は敗戦後、焼け野原と価値観の大転換の下で、「生活芸術」科の名称は輝いて見えたという。多くは建築関係の仕事に就くとは考えずに入学した。建築家になるという意志は、専門課程に入ってから醸成されたものであった。

### 4.2.3 第一世代を特徴づけるもの

第1に建築学科の女性パイオニア達と決定的に違っていたのは、周囲に同じ道を行こうとする友人がいたことである。女性建築家組織ポドコが結成された時でもあり、1回生の7人、2回生の5人がポドコの名簿に名を連ねていた。1950年代の日本の建築界は封建的女性排除と民主化の風とが交じり合っていた時期であり、前者に対しては共同で励ましあい、立ち向かう基盤をもっていた。

第2は、住居学専攻の目的は「女性の特質を生かした」職業人の養成であり、豊かな芸術味をおびた円滑な主婦の形成と共存したものであった。このことは世間が女性建築家に期待する「ダイドコロ・デザイナー」に墮する可能性を含んでいたが、林雅子は「建築そのものと正面から対決」<sup>註18)</sup>する姿勢を生涯貫いた点で際立っている。

第3は、住居学専攻は、当初早大や東大の非常勤講師が大半であったが、新生日本の女子教育に熱心に取り組

み、学生もそれに応えた。卒業後、東大、東工大等の研究室に入る者も多く、2回生は在学中に児童施設研究所河野道祐や川添登の指導を得て卒業論文を作成している。

### 4.3 新制・共学大学の卒業生たち

ここでは、新制大学の建築学科等を女子学生としては最も早い時期に卒業し、建築関係の職に携わるようになった方たちの何人かにインタビューを実施、「草創期の女性建築家・技術者」の特質を明らかにすることを試みた。結果の一覧は表4-1に掲載している。

#### 4.3.1 プロフィール、家庭・教育環境など

##### 1) 1930年代

インタビューしたほぼ全員が1930年代前半に生まれている。武蔵工科大学に編入した中原のみ1929年生まれであり、東京大学を卒業した富田は逆に30年代最後に近い1938年に生まれている。職業を選択する年齢にさしかかったころは、ほとんど戦後復興期にあたっていると考えてよい。狭小・劣悪な住宅の状況は、社会問題として彼女たちの前に存在していたと考えられる。

##### 2) 家庭環境と職業への考え方

家庭環境について、インタビューではあまり深く尋ねていないが、ほとんどが中流以上の家庭環境であり、「大学へ進学して勉強すること」について「女性だから」という理由で阻止された例もあまりなく、比較的リベラルな教育環境に育ったと思われる。卒業後の進路について佐伯や草野のインタビューに典型的に見られるように「研究の道」や「研究所への就職」なら一という形で大学院へ進学することを許されていることからみると、「職業につかなくていい、勉強するのはいい」という教育方針だったのではないと思われる。さすがに海外留学などは「とんでもない(佐伯、草野)」と考えられた時代でもあったようである。

##### 3) 家庭と子ども

インタビューした8人のうち7人が結婚している。配偶者は同業に近い仕事にあるケースが多く、結婚した7人のうち5人が建築関係の専門分野を学んだ配偶者を持ち、7人とも子どもを持っている。保育園が十分にない時代でもあったので、共同保育を仲間と試みたりしているが、結局、建築関係の仕事は夜遅くまでかかることが多く、親の支援を頼む例が多い。「仕事か結婚か」と選択を迫られたケースが少ないのは意外でもあったが「女性は結婚するのが当然、結婚すれば子どもを持つのも当然」と考えられた時代のこと、社会や家庭からの批判を受けないように環境を整えつつ自分の道を進んだ彼女たちの姿がある。この点は、もうひと世代前、吉田文子

や浜口ミホの時代とは違いが出ていたとも見られる。

#### 4.3.2 「建築」の道の選択

##### 1) 強かった自立意識

「建築」を職業として選択する基本にあったのは、インタビューに共通して見られる強い「自立意識」である。

「就職はあたりまえのこと、生きてゆく分の収入を得るべきである」と考えてきた奥村、子どもが自分一人での環境に育ち、はじめから「経済的自立が可能な職業に就こう」、「親が倒れても自分が働こう」とも考えていた草野が典型的である。佐伯、魚住、中原、加藤、吉田、富田も直接的には述べていないが、職業に就くのはむしろ当然と考えていたことが窺える。

選択肢が極めて少ない時代に「自立」可能な職業として彼女たちの多くが検討した職業は、建築家のほかには、医師、薬剤師、教師、公務員などであり、多岐にわたりあれこれ迷った形跡がみられる。多くは「芸術家になりたい」というものだったが、それは「食べていけない」ということからあきらめている。「医者になろうか」という迷いは、激しい競争を考えてあきらめたケースが多い。

##### 2) 父の影響

いずれにしても、職業のモデルがないままに選択を迫られた彼女たちにとって、検討の対象になったのは「父」の姿である。プラス側であれ、マイナス側であれ、父の存在は彼女たちに大きく影響している。父の職業がある種のモデルとなったと考えられる。母の影響をあげているケースは少ないが当時の状況を考えれば母親が職業についているケースはあまりないので、母をモデルに出来なかったのは当然とも考えられる。

##### 3) 選択の決定的要因

「自立意識」に加えて、「社会の役に立つ」という「使命感」にも似た感情が選択を裏打ちしているのも見逃せない（加藤、魚住）。共通の決定的要因は、「経済的に自立可能」を基本に、「絵やデザインが好き」、「数学が好き」という側面であるといつてよいであろう。

##### 4) 携わった仕事の種類

時代の事情に帰する問題であろうが、携わった仕事の種類は「住宅」関連が多い。

奥村、中原は設計事務所を自営したが、仕事は「個人住宅が多い」と述べている。佐伯は珍しいケースで、配偶者の実家が工務店を営んでいたことから、それを引き継ぎ、ガソリンスタンドの建設がメインの仕事であったと述べている。魚住、加藤は研究者として住宅の問題に携わった。吉田は設計と研究と両方をやりたいという希望に沿って設計事務所や大学での環境を選び、多彩な

実績を重ねた。富田は、奥村、中原と同じく設計事務所を設立し仕事をしているが、8人の中では新しい世代に属しており、学校、公民館などの施設の設計にも携わる機会を得ている。

「女性だから住宅を」という社会的な先入観が影響しなかったとはいえないが、むしろ時代の影響が強く、住宅以外の施設の設計は大事務所もしくは著名なデザイナーの下でしか仕事の機会がなかったと考える方が妥当ではないかと思われる。

#### 4.3.3 草創期の体験と努力

##### 1) 出産と子育て

「子育てを仕事と両立するのは大変であった」という意見は共通している。保育園や子育て支援策の少ない時代のこと、多くは母親や親族を頼っての子育てを経験した。吉田、富田は保育所に預け、共同保育など他の仲間と共同する試みもあった（奥村）。加藤は出産を機に職場を変え非常勤講師の道を選び、草野は子育てに専念した。

##### 2) 一般の無理解

事務所の同僚の間での差別はインタビューの話題には出てこない。むしろ大切にされた思い出が多い。しかし仕事の顧客など一般から見ると、専門職の女性は思考の対象になかったようであり、客が来て対応に出ても担当者だと思われなかったこと（草野）、紹介状を持って現場の視察に行っても、本人と思われなかったこと（魚住）、などが思い出されている。最も若い世代に近い富田でさえ、若いと男女にかかわらず職人、大工からの抵抗に会うことが多く、信頼を得るまで大変だったと述べている。

差別というほどでないにしても、日常的な不便はつねに存在した。典型的なのは、女子便所の不足である。多くの新制大学が女性の増加に追いつかず、ことに理工学部系では全くなかったところさえ存在した。インタビューでも、「文学部まで行った」、「職員トイレを借りた」など苦心したことがほとんどの対象者から出ている。

#### 4.4 建築学会等の受賞者

草創期の女性建築家の社会的評価を探る上で、受賞歴をみると、最初に名前が上がるのは、68年に〈海のギャラリー〉で朝日新聞建築ベストファイブに選出された林雅子で、80年には日本建築学会賞作品部門で初の女性受賞者になった。富田玲子は象設計集団の一員として77年に沖縄の作品で芸術選奨文部大臣新人賞及び都市計画学会石川賞を受賞し、81年に建築学会賞（作品）を受賞している。建築学会の作品賞は85年に受賞した長谷川逸子を入れて、80年代までは3人であった。吉田あこはリハビリテーション施設への貢献を評価され、医学の高木奨励賞を受賞している。

他方、学会賞論文部門では、1998年度ようやく菅原文子が受賞した。菅原は浜口ミホの事務所で働き、ポド

コにも参加したユニークな経歴の持ち主で、受賞したのは住居衛生に関する研究であった。

表 4-1 建築系学科の草創期の卒業生

	東京芸大 奥村まこと	早稲田大学 (I部) 佐伯洋子	早稲田大学 (II部) 草野智恵子	北海道大学 魚住麗子
プロフィール	<ul style="list-style-type: none"> <li>1930年、東京生まれ。自由学園を経て1949年東京芸術大学美術学部建築科入学。1953年卒業。</li> <li>1953-1972年吉村順三設計事務所。</li> <li>1972年から現在まで奥村設計所。</li> <li>1953年、近藤洋子氏、田中温子氏の呼びかけで発足したPODOKOに参加。</li> <li>1955年結婚、1957年に出産。</li> <li>1973年に和田氏と事務所を開き、1978年(有)木曾三岳奥村設計所となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1934年東京生まれ。父は水彩画家。</li> <li>24歳で結婚。夫は早稲田の建築出身で建設会社を経営する家だった。</li> <li>一般建築士は少なかったため、会社の役員として働いた。</li> <li>1985年社長になった。経営の苦労は大変だった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1934年北海道生まれ。1954年早稲田大学第II工学部建築学科入学、1958年卒業。広瀬雄二建築技術研究所入所。</li> <li>1963年第1回UIFA世界大会に参加。</li> <li>1964年早稲田大学理工学部建築学科修士課程入学。理工学部臨時建設局でキャンパスプランを手伝う。</li> <li>1966年修士、修士論文「建築の工業化」。安東研究室に籍を置き、武蔵工科大学助手・東海大学、文化学院等の講師。</li> <li>1970年結婚。翌1971年長女出産。</li> <li>1999年よりギャラリークン空間取締役</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1932年樺太生まれ。1953年北海道大学入学。工学部建築工学科進学。卒業論文「札幌市のアパートメントハウスの居住調査」。</li> <li>卒業と同時に北海道庁の試験に合格するが、採用されず、北大の施設課で働く。同年10月より道庁住宅課公営住宅係に配属。</li> <li>1961年から2年間北海道大学助手。非常勤講師を兼任しながら仕事を続ける。</li> <li>1966年(財)建築指導センター相談員。</li> <li>1980年旭川大学女子短期大学及び光塩女子学院勤務。1990年光塩女子学院嘱託。</li> </ul>
モチベーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>若いときは希望がいろいろあり、地質、気象、演劇、彫刻、建築などに関心があった。受験と、将来食べたいかという点から、建築設計が残った。</li> <li>自由学園の授業で2年上のクラスが建築をやっていたのが羨ましかったこと、F.L.ライトと遠藤新の建物の大学で学んだこと、吉村先生ら美術学校卒業生のグループ展で見た作品なども、建築を選んだ理由になっていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>父の姿を見ていて、芸大に行き画家になりたいと思っていた。しかし、父母は、「それでは生活していけない」「へんな男と恋愛したら大変だ」と思ったらしい。東京工業大学が早稲田大学ならいいということになり早稲田に合格。</li> <li>在学中に海外留学しようと思っていたが、親に反対された。大学院ならということ、東京大学の大学院に入った(岸田日出刀研究室)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>経済的自立が可能な職業に就こうと思いき、医者か薬剤師になろうと思った。「人の役に立つ」よりも、「食べていける、自立できる」という意識だった。反面、デザインが好きで、「衣食住」のデザインのうち、「住」分野は希少価値があると思って選択した。</li> <li>建築進学は家には大変反対された。親は「親が養えるにもかかわらず、娘が職業婦人になるのは体裁が悪い」という意見があった。</li> <li>「研究室」か「研究所」ならいい、といわれ、修士課程に進学。広瀬研は、「研究所」という名前が父の意見と両立できなかった。指導教官(安東勝男氏)の紹介状と自分の図面を持って押しかけた。</li> <li>広瀬研では「技術指導—プレファブ住宅」を担当</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>樺太で祖父が家の建替えなどとして以来、興味もあり、母が聞取図をかいたりしていたのも興味を持ってきかけた。</li> <li>高校最後の一年間で男女共学になったので、男子校に行った。数学の先生から勧められ、北大理系を受験。入学後は社に出たいという気持ちも強く、建築学科の教授に会いに行き、勧められて進学した。</li> <li>就職のときには民間は女性を全く受けつかなかった。構造の領域に行きたかったが、就職はなく、女子は学校の先生になるか、公務員になるかしか、道がなかった。</li> </ul>
仕事の種類	住宅が多い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>夫の家は中規模の工務店。</li> <li>エッソモーゲルの仕事(立地環境調査から工事まで)、果営・市営住宅建設、労働局の宿舎など。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>広瀬研では「技術指導—プレファブ住宅」を担当</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>住宅に関する研究(公営住宅の建設、標準設計、農村住宅、寒地住宅、住宅相談など)</li> </ul>
草創期の女性として	<ul style="list-style-type: none"> <li>出産の前後2ヶ月は有給休暇。吉村事務所には男女格差はない。</li> <li>PODOKOの間では不平等があると有志が交渉に当たったりした。このころは男女差よりもむしろ設計事務所の大手と零細の差が大きく、約30社の給料調査をしたら3倍の格差があった。</li> <li>保育園を探したがなかなか入れず環境のよくなかったので「働く母の会」に入り仲間と一緒に共同保育をやった。しかし、設計の仕事で帰りが遅く、母に頼んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>早稲田は同期生の女性には途中でやめてしまった人がひとりいた。女性が少ないので、ちやほやされ、あまり勉強しなかったと思う。東大時代もダンスにばかり誘われていた。</li> <li>6ヶ月間の入札資格停止処分や前社長の運常保証など、女性だから損をしたと思うことはたくさんある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>UIFA大会に参加する話が建築家協会を通じてきた。中原暢子とともに参加した。UIFA大会ではイギリス勢が「男女平等は実現している」という意見が、男女の間にハンディキャップがあるという大会が大分だった。</li> <li>広瀬研時代は、所内の雰囲気もクライアントも差別的だったとは思わない。しかし、来客は、自分が対応に出ると「誰かいませんか?」といひ、新入の男性が対応するとまじめに要件を話すような状態だった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>上司に恵まれた。勤務先では女性蔑視もなく、結婚し、子どもが生まれても、「出来るだけ続けたい」といわれた。おじ夫婦の協力、夫の理解もあった。</li> <li>女性の少ない時代だったため、「池田(旧姓)技術補が視察に行く」という紹介状を持って現場に行くと、「その方はいつ来るのか?」と聞かれたりした。</li> </ul>
仕事の種類	建築設計(個人住宅等の設計が中心)	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学院、国民生活研究所、大学教員として研究。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>東京オリンピック駒沢体育館、西台人工地盤、リハビリテーション施設ほか。</li> <li>筑波技術短期大学は施設委員長として創設にかわり、校舎計画を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今帰仁中央公民館、宮代町立笠原小学校ほか</li> </ul>
草創期の女性として	<ul style="list-style-type: none"> <li>戦時中は男女の教育が異なるため、大学では学力の差が出て苦労した。</li> <li>潘仏時に設計事務所勤務。男女や外国人に差別のないことを体験した。</li> <li>女性3人で設計事務所を開いた。「仕事は共同ではできない」という方針で、仕事は個別に行なった。共同でできるのは「経営」、「場所」、「用具」に限定した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>結婚時、今までの仕事の継続性から旧姓の使用を考えたが回りの雰囲気であきらめた。</li> <li>出産、3人の子育てを経験し、そのプランを理めるのが非常に難しいという思いがあった。</li> <li>日本住宅協会の編集部長の高橋野男氏から研究会に誘われ、初めての研究発表は日本住宅協会で行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>京大の同期の女子学生は全学で36人。体育は一緒。トイレの新設要求をした。</li> <li>男性中心の社会の中で女性一人では孤立してしまうので、女性建築家が組織化することの意義はある。</li> <li>子どもは2人共保育園。都立高等保育学院で教えていたときの情報で、よい保育園を紹介され、近くのマンションに住む。遅くなる時には学院の学生を雇った。子どもに任せがいったかもしれないと思う。</li> <li>大きな組織では女性として名前を出すに至らない仕事となることもある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>当初は医学部に入りたかったが、理科II類(医学部、理学部、農学部等に進学できる)に入学したが、その後医学部はあきらめた。建築は文化的、雑学的な部分をもっている。戦死した父(医師)が、建築がやりたかったとも書けており、絵も描いていた。そこで建築を志望。理I(工学)へ入る種があり、移った。</li> <li>大学院は最初は吉良研究室に数ヶ月いたが、調査研究ができず、自分に向いていないと思い、丹下研究室に入れてもらった。建築をつくりたかったのだと思う。</li> <li>女子学生として最初で1人であることは抵抗感もなかった。応用化学などには女性がいた。トイレだけは困り、文学部まで行った。</li> <li>女性の地位は、母(労働者婦人少年局長高橋原子氏)の世代ががんばってくれて、今は「女性」を主張しなくてもできるようになった。</li> <li>女性は覚えられやすいが、若い女性は施工や大工からの抵抗がある。若いと男女共からかかれたい対象になりやすい。しかし、一度信頼を得られれば、とてもよい関係になる。</li> </ul>

\*中原 暢子 UIFA JAPON記念講演「林・山田・中原設計同人の44年間」2002年6月29日 講演記録より  
 \*\*加藤由利子 「住生活に関心を寄せる女性研究所の会」2001年9月22日 講演記録より

## 5. 女性建築家の組織化—困難をのりこえるために

「圧倒的少数派」であった草創期の女性建築家・技術者たちは、少数であるゆえにかえって大切にされた面もあるが、日常生活ではさまざまな差別につながる不便があったと考えられる。それを乗り越え、仕事の上での能力を磨き、仕事を継続していくために、数の増加にともなう組織を作ることも考えられるようになる。ここでは、草創期の女性建築家・技術者が集まった組織として日本の「ポドコ」と、世界各国の動きが国際的連携につながった「UIFA」について資料に当たった。

### 5.1 ポドコ

#### 5.1.1 概要

ポドコは日本で初めてできた女性の建築関係者の組織である。設立は1953年。設計事務所所属12名、大学院・研究所所属8名、学生5名、建設会社等4名でスタートした(1953年度名簿)。エスペラント語「考える、話し合う、そして創る」を意味する「PENSADO・ISKUTADO・KREADO(ペンサード、ディスクタード、クレアード)」の頭文字からポドコ(PODOKO)と命名された(会報『PODOKO』1954年1月)。ポドコの歩みについては表5-1参照。

#### 5.1.2 設立の経緯

設立のきっかけを会誌『PODOKO』から引用すると、「私たちの会のそもそもの始まりは1952年の9月です。…「設計事務所員懇談会」が出来たとき40人ほど集まった事務所員の中に女は私と田中温子さんの2人きりだったのです。…「所懇」の女子部を作りたいという話になり、男の方達に事務所で働いている女の方を知らないかときいて回り始めたのが11月頃でした。…2人でどうしたらよいのか本当に迷ってしまったのです。その時思いついた

のが、浜口ミホ先生のことでした。私たちの話を聞いて大いに賛成して下さいました。…先生を通して何人かの方たちの名前がわかり私達はすっかり気を強くしてよろこんでしまいました。この時浜口先生が、関東学院の船越さんが前から会を作りたいとおっしゃっているからと彼女を紹介して下さいました。まだ会ったこともない船越さんとの文通が始まって間もなく船越さんから中原さんを紹介していただいたのです。6月頃だったと思います。…9月に入って急に、まだ何もない会に婦人画報の渡辺さんから仕事をもらってしまったという中原さんの話で大あわてに発会式に飛び込んでしまった次第です。…」(『PODOKO』創刊号：近藤洋子)とある。

発会式で決定した名称は、PODOKO(ポードーコ)。「考える、話し合う、そして創る、というのが私たちの会の日本語です。…この三つをくり返しくり返し、私たちの会はずすんでゆきます。」と宣言している。

「最初の1年間は、もっぱら会の内部的統一のための地がための年でした」(『建築をみんなで』日刊建材新聞社1956年刊)といいつつ、原稿をこなし、社会からの注目を浴びる。否応無しに、専門家として社会に発言をしていく会という性格が大きくなっていった。

#### 5.1.3 活動の展開—『ポドコ』創刊から4号まで

発会式のためのきっかけが婦人画報からの仕事の依頼であったということが、その後のポドコの活動の姿を決めていく大きな要素となった。社会への発言をしていく仕事として、白燈社の『住宅』に始まり、婦人画報社『台所について』では、「既存の婦人雑誌の同種の記事から見方、考え方を変え、家事労働の軽減を主な要素として設計例を提示、人体寸法と収納場所等との関係を図示、本文では水、熱、収納の三つについて説明図示などを出し、

表5-1 ポドコの歩み年賦

年	月日	主要事項	会員数
1952	9月	設計事務所員懇談会に近藤洋子、田中温子の2名が参加	
1953	6月	近藤、田中の2名が、およそ10名の女性の建築関係者の名簿を携え、浜口ミホ先生に会う。浜口先生の紹介で船越輝子参加、船越の紹介で中原楊子参加	
1953	9月14日	発会式：定例会の開催(毎月第2、第4火曜日)、会費(月50円)、世話人の決定、白燈社原稿「住宅」の執筆組分け、など決定	29
1953	9月～	定例会(原稿分担、運営方法、専門などの発表、大学教授などを招いた勉強会)、住宅見学会(日曜)、設計グループ会などを行う	
1954	1月5日	朝日新聞夕刊に「考え、議論し、創る 建築家のグループ「ポドコ」紹介	
1954	1月30日	会誌第1号刊行	39
1954	6月14日	会誌第2号刊行	
1954	8月24日	ポドコ1歳記念住宅コムベメ切-9月発表	
1954	12月～	家庭朝日に「生活のいれもの」連載(約1年間、毎月刊)	54
		新会員によるアンケート調査、「婦人建築技術者の問題」「ポドコの歴史」	
1955	4月	東ドイツ建築インターに代表出席	
1955～56年		会誌第3号刊行	
1956	6月	日刊建材新聞社「建築をみんなで」中に2編掲載	70余
1957	11月	会誌第4号刊行	

『PODOKO』1号、2号、4号、『家庭朝日』(朝日新聞社)、『建築をみんなで』(日刊建材新聞社、1956年6月)より作成

最後に主婦の家事労働の削減のために能率的な解決法をまとめた」という意気込みであった（『ポドコ』創刊号：小川信子）。活動については「まだ力不足を感じた」という自省の声があるとともに「それでも何かを成し遂げたという嬉しさは何とも言えない」ということも述べられるなど自負と充実感が伝わってくる（『ポドコ』第2号：中原暢子）。

さらにその後、「生活のいれもの」という記事を『家庭朝日別冊』にほぼ1年間、毎月連載することとなる。これは毎回、お客様とすまいの問題、台所用具、浴室、子ども部屋などとテーマを決め、わかりやすく専門的な知識や最新の情報を含めて紹介しているものであり、この頃のポドコの仕事の集大成と言えるであろう。

日常的な活動では、住宅の見学と批評、それに対する設計者自身へのインタビューなどがあり、当時住宅の設計に名高かった建築家が登場して、かなり突っ込んだ議論を展開して、厳しい批評的となったりしている。

#### 5.1.4 地位向上と職業の継続

当時の女性の建築関係者をめぐる生活環境、処遇の問題はきわめて厳しいものであったことが1956年の『建築をみんなで』の「建築にたずさわる婦人達」の中に示されている。1954年当時の労働省による男女賃金格差は20～24歳の男子に対し女子は71%、1955年のポドコの賃金調査でも平均で75.4%という数字である。その他、生理休暇や産休の定めがないところがかなり多いということも指摘されており、賃金の問題だけでも、本人の希望の金額と実際の支給合計額は、もっとも大きいところでは6000～7000円の開きが見られる。

家庭と職場の両立の問題として、未婚者の場合は、女性が仕事をもつことが当たり前という労働環境を作ろうとまとめているが、既婚者の場合は企業によっては既婚者を否定しているところもあり、それを打破するために既婚である事を隠して就職して1年間の実績を挙げた人の話が紹介されている。さらに子供をもった場合に仕事を続ける難しさも示されている。

ポドコの会員には、常に結婚や出産、育児による問題を抱える悩みが存在した。「建築をみんなで」の中の「婦人の集まりポドコ」の結びでは「①会員を一人も落さずに進んで行こうということ、②研究会、勉強会としてよりもたすけあう会として…ますます複雑になってくる生活の問題に対して…社会的な解決を考える時期にきている」という記述がみられ、ポドコは女性の地位向上のために協力するだけでなく、職場を去らねばならなかった会員にも勉強を続ける道を提供する組織へと成長した。1960年代頃にはその活動が下火となっているが、女性建築家・技術者の関わる広い問題に取り組んだという意味でもポドコの存在意義は大きいといえよう。

## 5.2 UIFA（国際女性建築家会議）

### 5.2.1 概要

国際女性建築家会議（UIFA=Union Internationale des Femmes Architectes）は、1963年フランスで設立された女性の建築家（都市計画者、研究者等も含む）の国際組織である。建築をはじめ、都市計画、環境計画、建築・都市史など幅広い分野に携わる女性たちが専門的視野から国を越えて情報交換を行い、この分野における女性の活動を拡大していくことを目的としている。会長はソランジュ・デルベツ・ド・ラ・トゥール（フランス）。本部はパリの彼女のアトリエに置かれている。

### 5.2.2 設立者のプロフィールと設立の経緯

UIFAの設立者ソランジュ・デルベツ・ド・ラ・トゥールは、フランス人の父とルーマニア人の母を持つルーマニア生まれのフランス人である。ルーマニアで建築を学び、Polytechnical School of Bucharestを卒業、フランスへ移住、1950年に自身のアトリエを設立、建築家として職業生活を始める。パリ市庁で都市計画の仕事をしたかったが、男性の採用しかなく、その後もたびたび女性であることを理由に仕事が順調に進まないケースが多く、これはUIFAを設立する大きな契機のひとつになったという（2003年UIFA JAPON設立10周年記念講演「私の仕事と人生」より）。こうした状況を打開するために「一人では何も出来ない、皆の力を集めて行こう」と1960年にフランス女性建築家会議（Union Francaise des Femmes Architects）を設立、やがて国際女性建築家会議の設立に至っている。現在、AIA名誉会員、UIAフランス代表（余暇・スポーツ部門）、レジオン・ド・ヌール勲章。

### 5.2.3 UIFA第1回大会の開催

UIFAの第1回大会は、パリにおいて1963年6月26日から7月3日まで開催された。

会議資料には『Statuts』<sup>註19)</sup>—規約—とプログラムがあり、会議記録<sup>註20)</sup>も出された（いずれも草野智恵子提供）。

設立の目的には、あらゆる宗教的・政治的関心を除外し、①すべての国の女性建築家、都市計画家の間に関係と交流を築く、②職業（キャリア）が女性にとってアクセスしやすくなるために団結して努力する、③世界のなかでこれらの女性の地位と職業生活についてのあらゆる情報を集める、④国際的な観点からすべての法律、とりわけ家族に関する法律を学ぶ、⑤全会員の間の友好関係と団結力をより一層強める、ことがあげられている。

来賓にはマズィオル建設相、マルロー文化相などの政府高官、ファラ王妃（イラン）などの賓客、UIAなどの関連団体、女性法律家協会会長、女性専門家協会会長、女性起業家協会会長など女性団体の長が記録され、各界から錚錚たる人材を招いた華やかな出発であったことがわかる。

#### 5.2.4 UIFA 設立当時の女性建築家の状況

会議後の記録には9カ国、78名の建築家たちが参加者として名を連ねている。最も多い参加者は地元フランスからであり、21名。次はドイツで18名だった。日本では、日本建築家協会（当時）にきた知らせを会員であった浜口ミホ、林雅子、中原暢子との間で検討、中原は積極的だったが「一人では…」ということで、準会員だった草野（当時小林）智恵子を誘った（草野智恵子インタビュー、中原暢子講演）。これにフランス遊学中であった林宣子が加わり、3名が参加している。

中原暢子は、「日本の住宅建設における女性建築家の役割とその作品」と題する発表を行い、浜口ミホや林・山田・中原設計同人の作品を紹介すると同時にポドコについて紹介し、1953年に設立された時点では23名だった会員が10年後の時点では70名に達していること、ポドコに関心を持たない女性建築家も他に30名程度存在していることなどを述べている。

他、スイス、ブルガリア、ポーランド、フィンランド、デンマーク、アメリカ合衆国、ギリシャ、チェコスロヴァキアなどの国がそれぞれ自国の女性建築家の状況について発表し、総括として「建築における女性問題はどの国もほぼ同じであること、時間の経過とともにすべての国で男女平等が浸透していくと思われる」と述べられているが、ポドコに関する日本の状況はヨーロッパ諸国、特にフランスの設立者ド・ラ・トゥールには大きな驚きだったらしく、「東方の国々で女性建築家の仕事が実りゆたかであるのに対し、フランスやスイスにおける女性建築家の立場が遅れていることは残念である」との感想が記録に残されている。大会は、定期的大会開催、そこで意見交換を継続することなどを確認し終了した。

#### 5.2.5 UIFA のその後と UIFA JAPON の設立

UIFA はその後、3～4年に一度程度の頻度で世界の各都市での大会を重ね、直近の大会は2001年にオーストリアのウィーンで開かれた第13回大会である。

日本では、長い間、個人的に世界大会に参加する状況が続いた。参加人数も徐々に増え、国際化が進行したことも追い風となって「いつも『客』として参加を楽しむだけでなく、積極的に今後の国際社会に貢献するとともに、大会の主催者として世界の女性建築家を日本に招き、交流し、現在の建築や都市にかかわる課題について議論しあう国際大会を日本で開催しよう」<sup>註21)</sup>という気運が高まり1992年UIFA JAPON (UIFA 日本支部: 会長中原暢子) が設立され、1998年に第12回大会を日本で開催する運びにつながった<sup>註22)</sup>。会長中原暢子、副会長小川信子が呼びかけたこともあってUIFAJAPONのメンバーには、日本の草創期の女性建築家すなわちポドコの元メンバーが多数参加しており、実質的にはポドコを引き継ぐ結果

となったが、会計担当だった岸本洋子からUIFAJAPONが正式に資料を譲り受けたのは「女性と建築展」終了後である。

日本大会には、31カ国から約300名が参加した。発表論文数56タイトル、展示参加数43点。会長ド・ラ・トゥールは、「建築や都市に関わるこれほど多様な分野でこれほど多くの女性が困難な状況を切り開きながら仕事を続けていることに心から敬意を表する」と述べている。

### 6. UIFA と女性建築家のアーカイヴ

#### 6.1 IAWA (International Archive for Women in Architecture) の存在

IAWAは、UIFAのメンバーでもあるミルカ・ブリズナコフ (Milka Bliznakov, ヴァージニア州立大学名誉教授) によって1985年ヴァージニア州立大学図書館の特別コレクションの中に設立された<sup>註23)</sup>。このアーカイヴは、大学の建築・都市計画学部やUIFAと連携しながら草創期の女性建築家等の資料を全世界から収集している。

建築分野における女性の関わりや世界の女性建築家の組織について、資料を収集、保存、蓄積、提供することによって、女性建築家、ランドスケープアーキテクト、デザイナー、建築史家・批評家、都市計画家に関する専門的研究を可能にすることが目的であり、収集の焦点は、「建築」、「女性」、「社会史」等の分野での草創期研究資料の不足を補うことを視野に入れ、この分野における女性が非常に少数だった時代（1950年代）に置いている。

IAWAのアドヴァイザー会議は2003年9月現在、17名のアドヴァイザーと4名の非公式アドヴァイザー、9名の名誉アドヴァイザー、計30名から構成されている。17名の内5名はヴァージニア州立大学に籍をおく教授、助教授メンバーであり、12名が大学外、内5名が米国外の国のメンバー（フランス、ドイツ、パキスタン、南アフリカ、日本）である。日本からは1997年より中原暢子がアドヴァイザーであったが、2003年より筆者（松川淳子）がその任にある。資金や人手不足に悩みながらも、地道な作業を続けている点では評価されるべきであり、UIFAの活動の世界への拡がりの成果であるといえよう。

#### 6.2 日本におけるアーカイヴの意義

本研究に際して、多くの草創期の女性建築家・技術者たちに直接インタビューし、貴重な資料を収集、所在も明らかにすることが出来た。これまでこれまで公開や分析をされてこなかった草創期の女性建築家・技術者に関する資料の収集継続と理論構築は大きな課題である。

##### 6.2.1 散逸の危機にある草創期女性建築家関連資料

「女性と建築展」を契機に始まった本研究を通じて、1930年代からすでに建築活動を開始していた吉田文子関連資料、20世紀の半ばには設立されていたポドコの会

誌、本年設立 40 周年を迎えた UIFA の 1963 年第 1 回世界大会の記録などを収集することが出来た。日本における草創期の女性建築家もすでに幽明を異にする人も出るようになり、ポドコ、UIFA 等の女性建築家の組織の設立者・参加者たちも高齢化していく状況にある。ごく一部を除いて光をあてられなかったことが原因となって関連資料は散逸・紛失する危機に直面している。

### 6.2.2 アーカイヴ設立に向けた活動の必要性

男女共同参画基本法も 20 世紀最後の年に成立しているが、2001 年時点の調査でさえ全国の大学で建築や都市計画を学ぶ学生の割合は平均して 20%強に過ぎない。ましてや活動している建築家、都市計画家等の女性比率は少数派である。法や制度の上での不平等はなくなっても、それが実質的に保障され、女性がこの分野での仕事を選択・継続することがより容易になり、男性も女性も互いに助け合ってよりよい建築やまちの創造をめざすためには、草創期の女性たちの思想や活動についての継続的な研究、資料収集・保存の必要性が明らかである。

現局面において、米国ヴァージニア州立大学の図書館の特別コレクションとしての「国際女性建築家アーカイヴ」の存在は大きい。これらの動きと連携しながら、国内事情について確実な研究や資料収集が継続されるべきであり、その拠点としての女性建築家・技術者に関するアーカイヴの設立に向けた活動が課題である。

## 7. おわりに

本研究の第一の目的であった草創期の女性建築家・技術者の資料を収集し整理することについては、まず、「草創期」の定義を 1960 年代前半までに定め、そのころまでに大学を卒業、あるいは活動を開始した人々に焦点を絞った。彼女たちのうち、すでに故人となられた方、戦前・戦中から活動を開始している人も含めて 14 人についてインタビューを実施、データとして整理、研究に反映するとともに、インタビューの結果は、オーラルヒストリー資料として保存することが出来た。また、この頃の女性たちが、草創期に直面する様々な困難や不便を協力し合って乗り越えるために組織化を目指した結果として作られたポドコや UIFA に関する貴重な資料も収集し、散逸の危険をとりあえず防ぐことが出来た。アーカイヴについての検討は大きな課題であるが、IAWA の存在について紹介し、これを訪問、今後の連携を図り、参考にして行くこととした。

資料収集、整理を通じて、明らかになった草創期の女性建築家・技術者にみられるその特質は、草創期特有の強い経済的自立意識であり、それを裏打ちする社会的使命感にも似た意識と仕事に対する熱意である。

## <注>

- 1) 会期：2002 年 3 月 14 日～8 月 20 日／場所：女性と仕事の未来館／主催：女性と仕事の未来館／協力：UIFA JAPON、(社) 日本建築士会連合会、(社) 東京建築士会、(有) 林・山田・中原設計同人／企画協力：(株) 生活構造研究所／企画監修：「女性と建築展」企画監修委員会
- 2) S. ホーンボルクは特待生として卒業、建築家となった。
- 3) MATRIX: *Making Space Women and the Man Made Environment*, 1984
- 4) PROFILE: *Pioneering Women Architects from Finland*, Museum of Finnish Architecture, non dated.
- 5) Beatriz Colomina ed: *Sexuality & Space*, Princeton Architectural Press, 1992
- 6) 小川信子・田中厚子：ビッグ・リトル・ノブライトの弟子・女性建築家 土浦信子、ドメス出版、2001 年
- 7) 北川圭子：ダイニング・キッチンはどうして誕生した女性建築家第一号浜口ミホが目指したもの、技法堂出版、2002 年
- 8) 建築家林雅子委員会編：建築家林雅子 1928-2001, 2002 年
- 9) RIBA: *Why do women leave architecture? Report Response & RIBA Action* (Web-site), 2003
- 10) 日本女子大学住居学科同窓会・住居の会：卒業生白書、1994 年
- 11) 北川圭子、前掲書
- 12) 柴谷邦は日本女子大学教員。戦後の住宅改善にかかわりながら、生活芸術科住居専攻(住居学科)設立に努力した。志賀英は 1944 年に日本女子大学家政学部を卒業、48 年物価庁。建設省住宅局初の女性キャリア。
- 13) 小川信子・田中厚子、前掲書 p. 121
- 14) 小川信子・田中厚子、前掲書 p. 207-8
- 15) 菅原可奈子：「女性建築家のパイオニア 吉田文子の生涯」和洋女子大学卒業論文、2003 年 1 月
- 16) 三好信浩：『日本の女性と産業教育 近代産業社会における女性の役割』東信堂、2000 年、p. 167
- 17) 日本女子大学住居学科同窓会・住居の会、前掲書
- 18) 建築家林雅子委員会編、前掲書、p. 307
- 19) UIFA, UNION INTERNATIONALE DES FEMMES ARCHITECTES, STATUTS,
- 20) UIFA, CONGRES INTERNATIONALE DES FEMMES ARCHITECTES -RAPPORTS ET MOTIONS, PARIS, JUIN 1963
- 21) 松川淳子：UIFA 日本大会に向けて、UIFA JAPON NEWSLETTER No. 19, 1996
- 22) UIFA 日本大会実行委員会：『UIFA 第 12 回日本大会報告書』1998 年 12 月
- 23) International Archive for Women in Architecture (紹介パンフレット)

## <研究協力者>

菅原 可奈子 積水ハウス株式会社